

- | | |
|---|----|
| 1. PERSON B. C. 5世紀、ギリシアの哲学者で、普遍的で客観的な人間探究を通して初の本格的な哲学をスタート。 | 1 |
| 2. ギリシア語の「愛知」 語源：英語の philosophy 「哲学」の語源 | 2 |
| 3. WORD ソクラテスの言葉で、「私は自分が善や美の真理を知ってはいないということを知っている」。これは「ソクラテスにまさる知者はいない」という神託を解釈したもの。 | 3 |
| 4. WORD ソクラテスの言葉で「無知の知」の自覚を主張したもの。 | 4 |
| 5. ソクラテスが金とか地位への執着を戒めた言葉で、アテネの青年に多大な影響を及ぼしたもの。 | 5 |
| 6. ギリシア語の「魂」。 | 6 |
| 7. 無知を自覚させ、自分の中にある真の知を生み出させる哲学の方法。語源：英語の dialogue 「対話」の語源 | 7 |
| 8. 問答を通して、相手が真の知恵を発見することを手助けする。もともと自分の中にある真の知を生み出させることからのたとえ。 | 8 |
| 9. 無知のふりをして問答し、相手に無知を自覚させるソクラテスの論法。「知らないふりをすること」が原義。語源：英語の irony 「皮肉」の語源 | 9 |
| 10. 国法を破って逃亡することを拒んだ際のソクラテスの言葉。「悪法もまた法なり」とともにこれも。 | 10 |
| 11. ソクラテスの主知主義の倫理思想で、「アレテー（徳）を知れば、それを行うことができる」の言葉で表現。 | 11 |
| 12. ギリシア語の「徳、優秀性」。 | 12 |
| 13. 感性よりも知性を重視する哲学の立場。関連語：心情主義・経験主義 | 13 |
| 14. ソクラテスの毒杯を仰いで自死した際の「悪法もまた法なり」に象徴される、知ることと行動の一致を重視した考え方。関連事項：中国（明）の王陽明が大成した陽明学 | 14 |
| 15. ソクラテスの「真の幸福とは、道徳的に生きる（よく生きる）こと」という言葉で表現された考え方。 | 15 |

T. Q. 「ソクラテスの説く問答法とはどういうものか？」

T. A.

問答法とは、他者と対話することで真理をともに探究する方法である。対話することで相手に無知を自覚させ、真の知を生み出させることから、産婆術にたとえられている。たえず自分自身を反省し、自らの独断を避けようとする問答法の態度から、現代の言論の自由や民主的な考え方が生まれている。